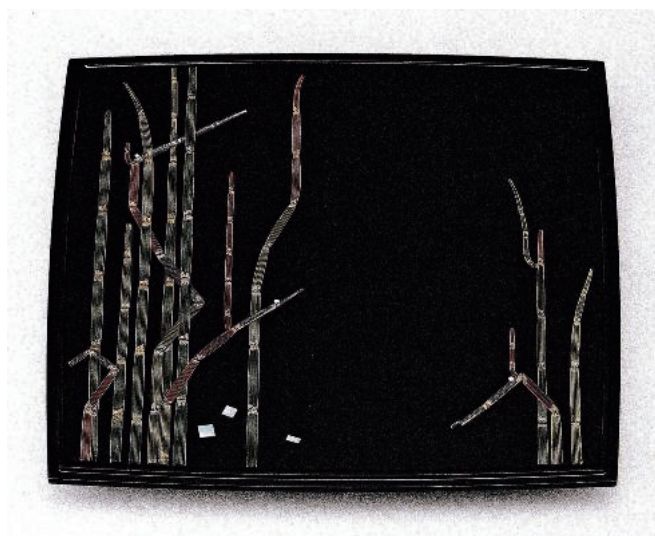


輪島塗復興プロジェクト関連特別展 輪島塗 ―漆文化を後世に―



《山茶花沈金飯椀・汁椀》輪島塗技術保存会蔵



《漆象嵌木賊の図四方盆》輪島塗技術保存会蔵
―「輪島塗 ―漆文化を後世に―」より―

- 武の装いⅡ 【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 古九谷・再興九谷Ⅱ 【古美術】
- みんなでたのしむびじゅつかん
何をのせる？何をいれる？ 【近現代工芸】
- 1950年代の日本画 【近現代絵画】
- 優品選 【近現代絵画・彫刻】

- 7月の行事予定
- 学芸室こぼれ話
- 早朝・夜間開館のお知らせ
- 令和7年度の新収蔵品

企画展(第7～9展示室)

輪島塗復興プロジェクト関連特別展 輪島塗 —漆文化を後世に—

主催／石川県立美術館、北國新聞社 企画協力／そごう美術館 特別協力／石川県立輪島漆芸技術研修所、石川県輪島漆芸美術館、輪島塗技術保存会
後援／NHK 金沢放送局、MRO北陸放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送、石川テレビ放送

6月27日(土)～8月2日(日) 会期中無休

華やかな装飾を施した黒や朱の漆器は、日本において様々な場面で用いられ、生活を彩ってきました。日本各地で漆芸が行われた地域はいくつもあります。では石川県を代表する漆芸、輪島塗とはどのようなものなのか、本展はこれを知っていただくことから始まる展覧会です。

輪島塗は堅牢かつ優美な漆芸として、昭和52年に重要無形文化財に指定されました。輪島塗技術保存会は約30にもおよぶ複雑な工程と、高い技術を継承するために結成され、漆芸分野で保持団体として初めて認定を受けました。第1章では、同保存会が制作した《輪島塗煮物椀制作工程見本》(国(文化庁保管))を中心に、輪島塗の工程をじっくりと紹介します。輪島塗の特徴である「堅牢優美」が、多くの技術者によって成り立っていることが分かるでしょう。

会期中には漆芸作家によるギャラリートークやトークショーなど、様々なイベントも開催されます。本展を通して一人でも多くの方に輪島塗の理解を深めていただければ幸いです。

【展覧会構成】

第1章 堅牢優美な漆芸「輪島塗」

1. 特徴と歴史

2. 制作工程・見本

第2章 継承されてきた練達の技

1. 積み重ねられた高度な技

2. 至高の漆芸

第3章 高度な技を後世に

1. 輪島からはばたく作家たち

2. 輪島漆芸技術研修所卒業制作から(震災以降)

【観覧料】

一般 1,000円(800円)

大学生 800円(600円)

高校生以下無料

※(一)内は20名以上の団体、および65歳以上の料金

※2階コレクション展観覧料を含む

※身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方またはミライO.I.Dご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

【関連行事】

・ギャラリートーク 各回13時30分

企画展示室 要観覧料・申込不要

輪島塗特有の工程や、歴史・現在・未来などについて解説します。

6月28日(日) 浦出勝彦氏(日本工芸会正会員・輪島塗技術保存会会長)

7月5日(日) 西 勝廣氏(重要無形文化財「沈金」保持者)

7月19日(日) 山岸一男氏(重要無形文化財「沈金」保持者・輪島漆器資料展示室館長)

7月26日(日) 小森邦衛氏(重要無形文化財「髹漆」保持者・輪島漆芸技術研修所所長)

・トークショー 各回13時30分～15時

美術館ホール 参加無料・要申込

保存会、作家各々の視点から、輪島塗の現在と未来について語ります。

6月27日(土)

浦出勝彦氏(髹絵・輪島塗技術保存会会長)、惣田登志樹氏(髹漆)、西端良雄氏(挽物)、中室惣一郎氏(髹絵)

8月1日(土)

小森邦衛氏(重要無形文化財「髹漆」保持者)、田中義光氏(髹絵)、水谷内修氏(沈金)、水口 咲氏(髹漆)

土曜講座 13時30分～15時

美術館講義室 参加無料・申込不要

7月11日(土)「スライドトーク」

寺川和子(当館学芸第二課長)

・ワークショップ 「親子で沈金に挑戦!」 13時 美術館講義室

7月20日(月・祝) 親子10組20名

参加費・親子1組2,000円、要申込



《春秋文様小判形弁当箱》輪島塗技術保存会蔵



ワークショップ申込



トークショー申込

武の装いⅡ

6月27日(土)～8月3日(月) 会期中無休

前号に引き続き、特集展示「武の装い」から展示作品を紹介します。

《蕨手文陣羽織》わらびでもんじんばおり 蕨のような模様がデザインされた袖なしの陣羽織です。赤と黄のコントラストが印象的な陣羽織ですが、幾何学的な模様の多いことが、前田家の陣羽織の特徴です。模様は縫われるのではなく、切嵌きりはめという異なる布地を嵌めこむ技法が用いられており、凹凸のない仕上がりとなります。

《黄無地陣羽織》きいじじんばおり こちらは模様のない陣羽織で、鮮やかな黄色一色で仕上げられています。陣羽織の素材はフェルトが用いられることがほとんどです。いずれも五代綱紀所用の陣羽織になります。

馬の背中に装着し、人が安定して座る道具となるのが鞍です。木に漆で仕上げられたものがほとんどで、形状も似ていますが、大名家に伝わる鞍については、前輪や後輪に豪華な蒔絵で模様が施されること

が多く見どころとなっています。

《唐桑雲龍彫鞍》からくわんりゅうほうくら 前輪と後輪に雲龍模様を力強く彫った珍しい鞍です。元禄9年(1696)に作られた鞍であることがわかります。

《紗綾形に丸龍文象嵌鐙》さやがた まるりゅうもんざうがんあふみ 鐙は馬に乗る時に足をのせる道具です。鉄でつくられ、表面には象嵌という技法で、金や銀の模様が施されます。この鐙は紗綾形の地模様、丸龍の模様が大きく入った鐙です。鐙に用いられる模様は、幾何学模様から動植物まで多種多様です。勝尾永秀の銘が入ります。

《真向兎文象嵌鐙》まむかいうさぎもんざうがんあふみ 鐙の正面にあたる鳩胸の部分に、真正面を向く兎の模様が施されています。耳が長いことがこの時代の特徴です。細かい毛並みまで、象嵌の技法であらわされています。盛定は京都から金沢に移り住んだ人です。



《真向兎文象嵌鐙》

学芸員の眼

「輪島塗」展第2章第1部には、輪島塗技術保存会の作品を展示し、普段は表に出ることが少ない仕事に従事する技術者の方々を紹介します。本文図版《春秋文様小判型弁当箱》は春と秋の草花の図柄を絵替で描いた6点組の作品で、木地は熊野忠次、髹漆は中浜儀太郎が手がけました。曲げ輪で作った被せ蓋2段重ねの弁当箱で、びったりと重なる楕円型の形、縁周りに朱がのぞく艶やかな黒塗地はすべて手仕事。匠のわざと言えるものです。蓋に施された蒔絵や沈金は6人の技術者がそれぞれ行っており、後に芸術院会員となった三谷吾一の名もあります。大型のパネル作品で知られる三谷は、小品においても卓越したセンスを発揮しており、当館所蔵の《鳥香合》や《双魚飾皿》には、近代沈金の中興の祖とされる、師・前大峰からの流れが感じられます。



三谷吾一《鳥香合》

・スイーツ付き鑑賞会
ルミューゼドゥアッシュ KANAZAWA 特別イベント
本展の鑑賞会とコラボスイーツを味わう時間がセットとなりました。
7月25日(土) 定員…各30名
18時～19時30分
美術館企画展示室↓ルミューゼドゥアッシュ KANAZAWA

参加費…一般2,500円 大学生2,200円
*税込み、特別展観覧料込み
申込…6月25日(木)～7月15日(水)
兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会
WEBまたは電話076-225-11371
平日9時～17時



鑑賞会申込

近現代工芸(第5展示室)

みんなでたのしみじゅつかん 何をのせる?何をいれる?

6月27日(土)~8月3日(月) 会期中無休
8月8日(土)~9月13日(日)

「親子で楽しむ美術館」として夏休み中に親子で美術館に訪れて作品を見ることを楽しんでいただきました。いと、こどもの目線を意識してはじまった特集ですが、こどもだけでなく、様々な人々に身近なテーマで作品鑑賞を楽しんでいただきたく、「みんなでたのしみじゅつかん」に冠を新しくしています。

今回の展示は作品の使いかたに注目し、「何をのせるのか?」「何をいれようか?」など、用途を考え、会話をしながら楽しんでいただく作品が皆さまをお迎えします。

村上九郎作《鎌倉彫貝図八足卓》。鎌倉彫とは、木製の素地に文様を彫り、その上に漆を塗る技法です。中国から伝来した彫漆(漆を塗り重ねてから彫る技法)をお手本として考えられたと言われています。木彫

の上に漆を塗るため、漆工芸の技術だけでなく、彫刻も高い技術を求められます。

この作品、卓とあります。仏前に置いて使用する机でしょうか。今で言うテーブルの仲間でしょうか。彫刻の入っているでこぼこのテーブル、大きさや高さから、あなたならどこに置きますか?何をのせますか?どのように使ってみますか?

机?お皿?箱?おおきなもの、ちいさなもの。さあ、自分なら何をのせよう?何をいれよう?作品から受ける感じ方、発見などを、自分はもちろん、家族と、友人などと美術館に一緒に訪れた方と楽しんでください。今回も2期に渡り、夏休みと秋の行楽シーズンでの開催となります。

皆様のご来館をお待ちしております!



村上九郎作《鎌倉彫貝図八足卓》

古美術(第2展示室)

古九谷・再興九谷Ⅱ

6月27日(土)~8月3日(月) 会期中無休

前号に引き続き、特集展示「古九谷・再興九谷」から出品作品を紹介します。

《赤絵花鳥文輪花小皿》民山窯 春日山窯の廃業を惜しみ、加賀藩士武田秀平によって、文政5年(1822)に開かれた窯です。御細工所の細工人でもあった秀平は、多種多芸で、特に木彫に優れ、友月と称しました。陶号は民山で、赤く細かな描写が特徴です。民山窯の代表作品のひとつで、見込み円窓内に南画風の山水図が描かれています。高台内には「民山」の銘が入ります。

《色絵唐獅子牡丹図平鉢》若杉窯 現在の小松市若杉町にあった窯です。青木木米に伴って春日山窯に従事した本多貞吉が、若杉窯の隣村花坂村にて良質の陶石を発見、作陶をはじめたことにより、若杉窯は

発展します。全国から陶工名工が来窯し、阿波国徳島から赤絵勇次郎といわれる上絵の名工もいました。若杉窯の中でも、もっとも大きな器のひとつです。裏面に「勇」の文字が入り、赤絵勇次郎の作品であることがわかります。

《色絵象人物図角皿》吉田屋窯 大聖寺の豪商豊田伝右衛門が開いた窯が、吉田屋窯です。吉田屋は豊田氏の屋号で、窯は文政9年(1826)に山代の越中谷に移ります。日用品から芸術的に優れた作品まで多岐にわたり、うまく併用しながら経営されました。古九谷青手の「塗埋手」を踏襲しながらも、古九谷のような豪快な筆致ではなく、軽妙な筆づかいが吉田屋の特徴となっています。本作品は、象という珍しい動物が題材です。



《色絵象人物図角皿》吉田屋窯

近現代絵画・彫刻(第3・4展示室)

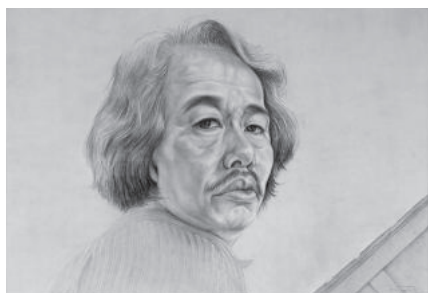
優品選

6月27日(土)～8月3日(月) 会期中無休

素描分野から、脇田和の人物デッサンと木下晋の鉛筆画をご紹介します。脇田和のデッサンは、十代半ばにベルリンの国立美術学校に留学していた頃、解剖学や遠近法など徹底した基礎的修練で培われた

暑さがますます強くなる時期となりました。油彩画分野から、竹沢基《装ひ》をご紹介します。さわやかな水色のワンピースを着た女性と、そのスカートを採寸する女性が描かれています。画面奥には外を見られるように向けられた足踏みミシンが置かれ、今まさにこの水色のワンピースを仕立てている場面ようです。竹沢は親しい人をモデルとして描き、その人独自の形や雰囲気表現するためにシンブルなポーズをとらせたといいます。

素描力のあらわれた作品です。また、木下晋は「良いデッサンはモノトーンでも色を感じさせる」という考えに基づき、鉛筆のみによる表現に挑んで独自の表現方法を確立し、作品を制作しています。第4展示室、彫刻分野からは、石田康夫《昇華》にご注目ください。人間の本质や内面の美を具象彫刻によって追い求めた石田は、シンブルながら量感と生命感に満ちた裸婦像を多く制作しました。本作では、髪が風にひるがえり、天を指し示すように右手を挙げた姿を表します。躍動感と量感、そして写実に基づいた瑞々しい生命感を持っています。



木下晋《自画像》

近現代絵画(第6展示室)

1950年代の日本画

6月27日(土)～8月3日(月) 会期中無休

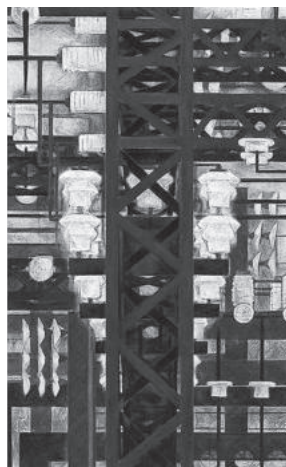
我々が美術作品を鑑賞するとき、まず作品そのものの良さを味わうでしょう。やがて、目の前の作品を生み出した作者の考えに想いを馳せます。さらに、そこに至るプロセスを作歴や師系、当時の美術シーンに求めます。もちろん世相や歴史とも切り離すことはできません。それらを時系列のつながりの中に理解したとき、我々に「美術史への扉」が開かれるのではないのでしょうか。

さて、世界が封建的な圧力から解放されつつあった19世紀、パリに集結した画家たちによって、色や形を対象から解き放つ新たな絵画表現が模索されました。「印象派」の誕生です。そのような印象派の表現は、抽象表現主義へと踏み出す一歩となりました。

時は20世紀、世界の美術はフォービズムやキュビズムを経て、シュルレアリスムや構成主義などを経

験します。そして二度にわたる大戦から平和を取り戻したころには、非定型の激しい抽象表現、アンフォルメル運動へと推移していました。戦後の日本では、それらが遅れて一緒に押し寄せます。まるで世界から取り残された時間を取り戻すかのように。抽象表現ブームが日本の美術シーンを席巻したのです。そのような状況下において、特に日本画家たちの仕事には戸惑いが感じられます。「今、自分はずいぶん絵を描いているのか」と。

このたび、1950年代を前後する画家たちの、試行錯誤を感じていただくべく特集します。「美術史の扉」が、皆様に開かれることを期待して。



下村正一《送電柱》

学芸室こぼれ話

前多 武志(学芸主幹兼学芸第一課長)

「私にとってのささやかな美」

休日の朝、コーヒーを淹れて家族と過ごす時間が好きです。コーヒー豆は、浅く煎られたエチオピア産の小柄な豆も綺麗だと思えますし、深煎りのつやつやとしたブラジル豆の佇まいも良いと思います。その背景に、山岳地帯に広がる農園の濃い緑や、真っ赤な実を手摘みする人々の姿が浮かんできます。もちろん行ったことはありませんけど。

豆を挽き、湯を注ぐと豊かに膨らみます。蒸れるのを待つて再度注ぐと、粒の揃ったちよつと粗目の泡が立ち、3投目ではクリーミーな泡に変わります。そしてコーヒーが円錐フィルターをゆつくりと透過しきるのを待ちます。このとき緩い渦状に残った粉が現れるのもいとをかし。以上が私にとっての「ささやかな美の瞬間」です。器の話に行き着く前に紙幅が尽きてしまいました。機会があればポーリッシュポタリーのお話を。

7月の行事予定

■対話で！作品鑑賞会

毎月第2日曜日、作品についておしゃべりしながらコレクション展示室を楽しめる日「のびのび鑑賞デー」の恒例開催です。学芸員のサポートのもと、参加者同士で対話しながら作品鑑賞を行います。一人で鑑賞する時とは違った鑑賞の楽しさを味わってみませんか。

日時：7月12日(日) 11時～11時30分*申込不要

集合場所：2階 コレクション展示室前

定員：10名程度(先着) 料金：要コレクション展観覧料

*友の会会員のみなさまは、会員証のご提示で無料

■土曜講座

7月11日(土)「スライドトーク」 学芸第二課長 寺川和子

7月18日(土)「みんなでたのしみじゅつかん スライドトーク」

普及課長 西 ゆう子

7月25日(土)「1950年代の日本美術」学芸第一課長 前多武志

日時：13時30分～15時 会場：講義室

*聴講無料、申込不要

■輪島塗復興プロジェクト関連特別展

「輪島塗 ―漆文化を後世に―」関連行事

*各イベント情報は本誌2頁をご覧ください。

早朝・夜間開館のお知らせ

輪島塗復興プロジェクト関連特別展「輪島塗 ―漆文化を後世に―」の開催にあわせて、左記の期間に開館時間を延長します。

館内カフェ「ルミューゼドウアッシュKANAZAWA」では特別にモーニングセットをご用意！たくさんのご来館をお待ちしております。

◆早朝開館(8時30分から)

7月4日(土)～8月2日(日)の土・日・祝日

◆夜間開館(19時まで)

7月3日(金)～8月1日(土)の金・土および7月19日(日)

※通常開館時間 9時30分～18時

			8:30から 開館	19:00まで 開館
7月	3	金		○
	4	土	○	○
	5	日	○	
	10	金		○
	11	土	○	○
	12	日	○	
	17	金		○
	18	土	○	○
	19	日	○	○
	20	月祝	○	
	24	金		○
	25	土	○	○
	26	日	○	
	31	金		○
8月	1	土	○	○
	2	日	○	

令和7年度の新収蔵品

寄附

No	分類	作品名	作者名	員数	制作年	寄附者
1	洋画	道化	藤井多鶴子	1面	昭和36年（1961）	田辺久美子
2		空身		1面		
3	日本画	秋景山水図	山田 敬中	1幅	大正～昭和	山田 敬伸
4		鍾馗図		1幅	昭和3年（1928）	
5		松陰高士図		1幅	昭和初期	
6		柿	山田 申吾	1幅	昭和初～中期	
7	素描	挿絵 No.1 現代家族	鴨居 玲	1面	昭和50年代	
8		挿絵 No.3 酒は百薬の長		1面		
9	人形	塑造彩色「土の響」	紺谷 力	1点	昭和55年（1980）	
10		塑造彩色「蚩」		1点	平成3年（1991）	
11		塑造彩色「桜雛」		1点	平成5年（1993）	
12		塑造彩色「豊穰の歓び」		1点	平成9年（1997）	
13		張抜紙貼「韋駄天」		1点	平成14年頃（c.2002）	
14		塑造彩色「腰鼓遊楽」		1点	平成16年（2004）	
15		張抜紙貼「護法童子」		1点	平成21年（2009）	
16		塑造彩色「散華」		1点	平成22年（2010）	
17		塑造彩色「花下童舞」		1点	平成23年（2011）	
18		張抜紙貼「迦陵頻伽」		1点	平成26年（2014）	
19		塑造彩色「羅浮仙」		1点	平成27年（2015）	
20		塑造彩色「後宮の勅姫兵」		1点	平成28年（2016）	
21		桐塑彩色「修二会幻想」		1点	令和元年（2019）	
22	刀剣	太刀 銘千早城	隅谷 正峯	1振	昭和45年（1970）	
23		太刀 銘千本		1振	昭和52年（1977）	
24		脇指		1振	昭和44年（1969）	
25		短刀（包丁正宗写）		1振	昭和38年（1963）	
26	陶磁	灰釉蓋置		1点	昭和57年（1982）	
27	刀剣	脇指 銘賀州住兼若造	兼若	1振	江戸時代	
28		太刀 銘賀州住藤原景平	景平	1振		
29	人形	木芯桐塑紙貼「童 御陣乗」	高田 和司	1点	令和2年（2020）	高田 和司
30		木芯桐塑紙貼「まつりの日」		1点	令和3年（2021）	
31		木芯桐塑和紙貼「蒼天」		1点		
32		木芯桐塑和紙貼「銘松 冬支度」		1点	令和4年（2022）	
33	染織	刺繍屏風「筒井筒」	稲葉 隆子	2曲1隻	明治時代	木村 裕子

購入

No	分類	作品名	作者名	員数	制作年
1	陶磁	幾何紋金白金彩台皿	多田 幸史	1客	令和4年（2024）
2		葉紋白金彩組鉢		5客	
3		真珠光彩片口	中田 博士	2口	
4		真珠光彩酒呑		5口	
5		真珠光彩茶入		1合	
6		真珠光彩水指		1合	
7		赤絵細描小紋大皿	見附 正康	1客	
8		赤絵細描小紋小皿		5客	
9		緑彩真麗線文酒器揃	宮本 雅夫	5組	
10		緑彩真麗線文茶碗		5口	
11	漆工	高杯「螢」	田中 義光	5客	
12		乾漆銘々盆「節黒仙翁」	水口 咲	5客	
13	金工	湯のこもるカタチ	坂井 直樹	3口	
14		「侘び」と「錆び」の設え		2組	
15		湯のこもるカタチ		1口	
16		火のこもるカタチ		1組	
17	木工	入子椀	中嶋 武仁	5客	
18		酒器		8口	

令和7年度新収蔵品51件 収蔵品総計（令和8年度4月末現在） 4,119件



山田敬中《鍾馗図》



山田敬中《秋景山水図》



山田敬中《松陰高士図》

《坂に建つ街》さかにたつまち

縦245.0 横154.0(cm)

昭和29年(1954) 第10回日展

山本知克 やまもとともかつ

昭和2(1927)～平成15(2003)



作者の山本知克は1927年、京都画壇の重鎮、山本倉丘のもとに生まれ、父と同じく堂本印象主宰の画塾・東丘社に籍をおきました。堂本印象は近代の巨匠とも言える存在で、旺盛な制作意欲で宗教的なテーマから抽象表現に至るまで、挑み続けた画家です。東丘社では堂本印象から受け継いだ進取の気風が画塾全体を覆っており、画家たちの多くは1950年代を前後して、師に倣い抽象表現にも取り組みました。特集「1950年代の日本画」の頁に詳述しましたが、この頃は日本中が抽象表現に影響を受けていた時代。東丘社はその先頭を走っていました。

で、第10回日展において特選・白寿賞を受賞。坂に建つ街並みを幾何学的に整理し、近景から遠景までの豊かな距離感と、適切なヴァール（色価）から生まれた静謐な空間が特徴です。

この後、徐々にアンフォルメル（非定型）という、明確な形を持たない抽象表現へと傾倒し続けます。父の山本倉丘からは、顔を合わせるたびに具象絵画へ戻ってくるよう諭されていたといえます。やがて10年の歳月を経て具象絵画へ回帰すると、晩年まで街並みを俯瞰した作品を発表します。写実的な作風の中に抽象表現から学んだエッセンスが感じられるものでした。（特集「1950年代の日本画」にてご覧ください）

次回の展覧会

令和8年8月8日(土)
～9月13日(日)
会期中無休

前田育徳会尊経閣 文庫分館		第2展示室	
近代の美術 ー油彩画ー		琳派 I ー光悦・宗達・宗雪ー	
第3・4・6展示室	第4展示室	第5展示室	企画展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	文学と美術の出会い 【水彩・素描・版画】	みんなでのんびりじゅつかん 何をのせる？ 何をいれる？	巴水・夢二・暁斎 ～ニッポンの美紙展～

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

7月6日は第1月曜日より

コレクション展観覧無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

7月は無休で開館しています

石川県立美術館だより
第513号(毎月発行)
2026年7月1日発行

〒920-0963

金沢市出羽町2番1号

Tel:076(231)7580

Fax:076(224)9550

URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。

広告代理店が運営する 大人のためのデザインスクール

キテンスクールの
オンライン授業なら...

01 | オンラインで好きな時間にマイペースで学べます

02 | スキルアップ・副業・趣味に活かれます

Design Life

広告

詳しい資料の
ご請求はこちら

キテンスクール 〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501 tel:072-668-3275 画室 株式会社ウィット